

はじめに **捺文～アイヌ文化と「大和」「元」… 本州や大陸とのかかわり**

「桃太郎」の話を知っていますか？ この話は、鬼を「村人を苦しめた盗賊」と考えれば、財産を取り返しにいった正義の人の話ですが、鬼を「別の地域に住む、文化やすがたのちがう人」と考えると、宝に目がくらんで、人の暮らしをこわしたひどいやつの話、となります。

北地方北部支配の拠点を手に入れていきました。

● **北海道は「高級ブランド品」の原産地**

捺文文化からアイヌ文化へと、北海道の文化が移り変わっていくころ、本州では平安時代から鎌倉時代へと変わっていきます。

このころの（これ以降も）貴族や豪族、武家にとって、北海道など北方でとれる「ワシ・タカの羽」や「アザラシの皮」などは、とても貴重なものでした。ワシ・タカの羽は矢羽に、アザラシの皮は乗馬につける「あおり」として用いられ、実用品として、それ以上に美しくかざりたてるための物として使われました。

今でいえば、超高級ブランドだったわけです。捺文～アイヌの人たちにとっては、これらは重要な交易品でした。

ワシ・タカの羽やアザラシ皮などをとって本州の人にわたし、かわりに鉄なべや刀など鉄の道具や陶器、うるしめりのおわんや杯、かざりとして使われた古銭（当時のコイン）や和鏡、朝鮮半島で作られた青銅の器などを受け取っていたのです。

アイヌ文化が成り立っていく上で、これら本州からやってきたものは、生活の中で、あるいは祈りや祭りの場で、大きな役割を果たしていきます。

一方で「北のブランド品」は、それを手に入れた人や本州の中心地に送る人たちにとって、とても自慢できるものであり、大変「もうかる」ものでした。となれば、何とか安く、たくさん手に入れて、さらに大もうけをしたいと考える人もでてきます。

人にはあつかわず、自分だけで商売し、北海道の人をごまかせば、いくらでももうけることができます。そのために、争いが起き、大きな悲劇が起こることになります。

● **東北地方での争い**

捺文時代半ば過ぎの11世紀ころ（平安時代後期）、東北地方の北部（岩手県北部や秋田県北部と青森県）に暮らしていた人々の中には、伝統的な暮らしを続ける人のほかに、大和文化の人（和人）のように暮らす人、また豪族・武家となって「領地」を持つ人がいました。

このころ、大和中央による東北地方の支配はあまり強くありません。豪族たちは、ある程度独立した支配と争いをおこないました。豪族には岩手・青森を支配する安倍氏、秋田を支配

● **東北地方にせめこむ大和（日本）**

7世紀、捺文文化（→p 102）ができてきたころ、本州中部では「大和の改新」があり、大和朝廷を中心とする「大和の国（日本）」が大きくなっていきます。この大和の人たちは、支配できていない東北地方あたりから北の地域や人々を「エミシ」と呼んでいたようです。

大和朝廷は大和の国を発展させていくために、大和に従わない人たちである「エミシ」やその土地を支配しようとしています。そのため、軍隊も送りこまれました。

7世紀の中ごろには、湊足柵（新潟市付近）や磐舟柵（新潟県村上市付近）などの城柵（支配拠点）が置かれ、また、阿倍比羅夫が水軍を率いて、東北地方の（さらには北海道の？）「エミシ」と戦っています。

8世紀には、多賀城（宮城県多賀城市）、桃生城（宮城県石巻市）などの城柵が宮城県北部にいくつもつくられます。

8世紀末（平安時代が始まるころ）には、大和朝廷は何度も軍隊を岩手県南部に送りますが、アテルイなどの指導者を持った「エミシ」軍は、これを何度も破りました。

大和朝廷軍は、坂上田村麻呂らを大将として軍隊を立て直し、またせ

めこみます。ついに802年、アテルイ軍は田村麻呂軍に敗れます。この時、田村麻呂は、胆沢城（岩手県奥州市）という城柵をつくりました。

翌803年、田村麻呂は志波城（岩手県盛岡市）をつくり、こうして、大和朝廷は東



7～9世紀につくられた東北地方の城柵。（『北日本の考古学』より、改変）

※1 城柵（じょうさく）：古代日本で、今の東北地方などのエミシを支配下に治め、殖民を進めるために設置された、柵や盛り土などで守りを固めた役所。「〇〇城」、「〇〇柵」と記録される。湊足柵については、環日本海貿易の交易拠点だという説もある。

※2 安藤氏（あんどうし）：津軽（つがる）地方を支配した武家・豪族で、室町時代には羽田秋田郡（でわのくにあきたくん）までを支配した。室町時代中期以降は「安東氏」とされる例が多い。この本では「安藤」で統一する。

する清原氏^{きよはらし}などがありました。そこへ、源氏^{げんじ}が^{やまとちよ}大和朝廷の「国司^{こくし}（地方支配役人）」としてかかわってきます。

これら三家の「支配^{しはい}」への欲望^{よくぼう}や「北の高級ブランド品^{よくぼう}」への欲望、さらには兄弟間の争いなどがからまり、何度かの戦い（前九年の役・北奥合戦・後三年の役^{えき}など）が起きます。

その結果^{いわたげん}、岩手県南部の平泉^{ひらいづみ}に、安倍氏^{あべし}の血を引く「藤原氏^{ふじわらし}」ができて、東北地方北部を支配し、北海道^{しはい}と交易^{こうえき}することになります。

12世紀末、鎌倉幕府^{かまくらばくふ}をつくった源頼朝^{みなもとのよりとち}が平氏^{へいし}に続いて藤原氏^{ふじわらし}をほろぼし、征夷大將軍^{せいゐたいしやうぐん}となります。13世紀、幕府^{ばくふ}は津軽の豪族^{ごうぞく}「安藤氏^{あんどうし}」を「北の支配者^{しはいしや}」として登用^{とうよう}し、安藤氏^{あんどうし}は東北と北海道の一部を支配^{しはい}します。

こうして、大和と東北地方の人たちが戦い、大和の文化^{やまと}が広がり、東北の人同士が争うなどする中で、大和^{やまと}の支配^{しはい}が東北地方全体へと広がっていきました。

● 擦文文化とアイヌ文化の人たち

12・13世紀ころまで続いた擦文文化^{さつもんぶんか}ののち、北海道にはアイヌ文化^{あいにんぶんか}が広がります。

擦文文化^{さつもんぶんか}とアイヌ文化^{あいにんぶんか}では、「土器^{どき}を使う⇔使わない」、^{たてあなしき}「竪穴式の家⇔平地式の家」、^{やまと}「家にかまどがある⇔かまどがない」、などといった、かなりはつきりしたちがいがあります。

では、擦文文化^{さつもんぶんか}の人たちが北海道からいなくなり、新しくアイヌ文化^{あいにんぶんか}の人たちが、どこからか入ってきたのでしょうか？

そうではなくて、擦文文化^{さつもんぶんか}の人たちは、アイヌ文化^{あいにんぶんか}の人たちの祖先^{そぜん}だと考えられています。

さらにその前の続縄文文化^{ぞくじゆうもんぶんか}（→p 100）にも、アイヌ文化^{あいにんぶんか}とのつながり（例えば「スプーン」の先につけられたクマの彫像^{ちゆうぞう}＝有珠モシリ遺跡^{うしずもしり}）があるようです。

ただ、文化^{うつつ}の移り変わりを教えてくれるような遺跡^{いせき}（→p 70）などがあまり見つかっておらず、どのようにアイヌ文化^{あいにんぶんか}が成立^{りゅうせい}していったかは、まだよくわかっていません。

● 「元」と戦ったアイヌ民族

13世紀初め、大陸ではモンゴル帝国^{ていこく}ができ、やがて中国^{ちゆうごく}・朝鮮^{ちゆうせん}から西アジア^{せいあじあ}まで広く支配^{しはい}しました。1271年、国名^{くにな}を「元^{げん}」として、13世紀の後半には2度北九州^{きたきゆうしゅう}にせめこみ、鎌倉幕府軍^{かまくらばくふぐん}と戦^{いくさ}いました（元寇^{げんこう}）。

一方、アイヌ民族^{あいにんぶく}は、13世紀ころサハリン（かつて

の樺太^{からふと}）にもやってきていました。交易品^{こうえきひん}を手に入れることが目的^{もくひく}だったようです。

これに対して、モンゴル^{げん}（元^{げん}）が軍隊^{ぐんたい}を送りました。

こうして、1264年と1268年、アイヌ民族^{あいにんぶく}（津軽の豪族^{ごうぞく}・安藤氏^{あんどうし}が率^{りて}いたともいわれる）はサハリンの地でモンゴル軍^{げんぐん}と戦^{いくさ}い、敗^{やぶ}れました。

この戦い^{いくさ}は、安藤氏^{あんどうし}に対するアイヌ民族^{あいにんぶく}の不满^{ふまん}につながったようです。1275年、アイヌ民族^{あいにんぶく}は安藤氏^{あんどうし}と争^{いくさ}い、これをおさえようとした安藤氏^{あんどうし}の安藤五郎^{あんどうごろう}が殺^{ころ}されます。

アイヌ民族^{あいにんぶく}と元^{げん}は、さらに1284～1286年の3年間、サハリンで戦^{いくさ}いました。1308年、アイヌ民族^{あいにんぶく}は元^{げん}にみつぎ物^{つぎもの}をすることで争^{いくさ}いをやめました。



□ : モンゴル帝国勢力の最大の広がり。 ■ : 元。

一方、安藤氏^{あんどうし}に対するアイヌ民族^{あいにんぶく}の戦い^{いくさ}は、今の青森県^{あおもりけん}から秋田県^{あきたけん}などへ広がります。さらにこの戦い^{いくさ}は、1320年ころからの安藤一族^{あんどういちぞく}の内部対立^{あんどうし}（安藤氏の乱^{らん}）へとつながります。

この安藤氏の乱^{らん}を、鎌倉幕府^{かまくらばくふ}はなかなかうまく収めることができず、最後^{さいご}は幕府軍^{ばくふぐん}も出動^{しゅつどう}しましたが、それでもしずめることができません。1328年になって、ようやく戦い^{いくさ}が終わりました。

九州での「元寇^{げんこう}」は、武士たち（御家人^{ごけにん}）の生活を苦しめることになりました。また、戦い^{いくさ}のあと、ほうびの土地^{ごけにん}をもらうこともできなかったため、御家人^{ごけにん}たちの幕府^{ばくふ}に対する不满^{ふまん}は大きくなっていました。

そこへもってきて、なかなか安藤氏^{あんどうし}の乱^{らん}を終わらすことができなかったため、鎌倉幕府^{かまくらばくふ}はますます力を失い、1333年、ついにほろぼされました。

参考資料
 「アイヌの歴史と文化 I」榎森進 編、2003
 「アイヌの歴史と文化 II」榎森進 編、2004
 「新 北海道の古代 2 続縄文・オホーツク文化」野村崇ほか編、2003
 「新 北海道の古代 3 擦文・アイヌ文化」野村崇ほか編、2004
 「北日本の考古学 南と北の地域性」日本考古学協会編、1994
 「古代環日本海交通と渚足柵」武田佐知子、2005

※3 元寇(げんこう)：1274年の文永の役(ぶんえいのえき)と、1281年の(弘安の役(こうあんえき))。

※4 御家人(ごけにん)：この場合、鎌倉幕府の将軍にしたがう武士のこと。将軍に土地を守られ、与えられる(御恩：ごおん)代わりに、鎌倉や京都の警護(けいご)、戦いへの参加などの義務(ぎむ)(奉公：ほうこう)を負った。

第1章 十勝の平野で川ができた理由
 第2章 先史時代と川
 第3章 アイヌ文化と川
 第4章 十勝開拓と川
 第5章 発展、今、そして未来へ
 用語
 さくいん